

協議会ニュース

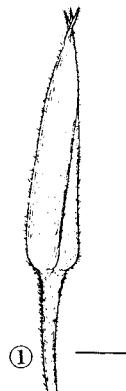
16号

愛知県自然観察指導員連絡協議会

61.9

オオマツヨイグサの開花

PM5:00



PM6:00



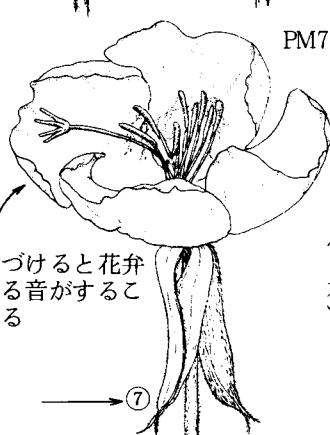
PM7:20



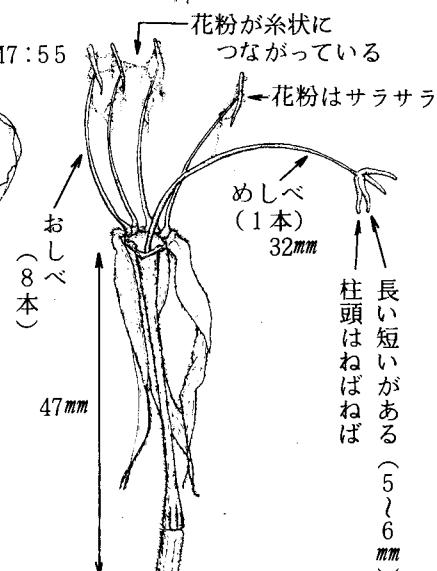
がく
が
すれ
はじめ
る



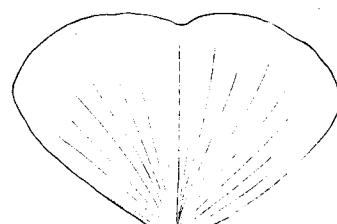
PM7:52



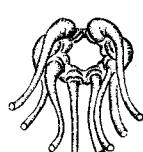
PM7:55



花弁の形



おしべ基部の
つき方



形がおもし
ろい

協議会ニュース 16号

• オオマツヨイグサの開花 (辻 伸夫) 表紙

• 特集・郷土の自然 2

葦毛湿原 (伊藤悦子)

• 支部だより 6

支部行事結果 支部行事から 地域の出来事

• 会員広場 9

楳(たら)の木の愚痴 (木村 滋)

一筆啓上 (相羽福松)

自然保護と山村 (富山 茂)

下刈り雑感 (木見尻哲生)

• 観察と研究 11

一人よがりの自然研究 (竹内哲也)

• 会員紹介 13

私と自然 (大竹・勝)

• 行事報告等 14

理事会(5.24)、編集委員会(5.30)、他県の協議

会機関紙から

• 行事案内・お知らせ 15

行事案内 会員移動 お知らせ 刊行物案内 編集後記

オオマツヨイグサの開花
(表紙絵)

6月雨の季節を迎えて、曇りの日が多くなりました。

そんな日の夕ぐれ……道端に目のさめるようなレモン・イエローの花が咲きそろいます。

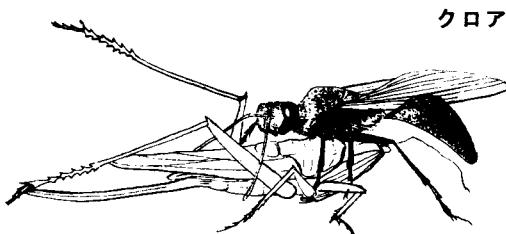
この美しいオオマツヨイグサが、夕ぐれになり咲きはじめるところをごらんになりましたか。夕やみせまるころ、このツボミがいっせいに動き出したかのようです。花びらが解け始めて開花はほんの一瞬のできごとです。これをながめていると自然の神祕を感じます。

そして、あまり人目につかない夜中には、大きな花を力いっぱい開いています。花を求めて、スズメガなどの大形のガが吸蜜に訪れます。大形のガは大切にしたいので、そのためにもこの花がたくさん咲いてほしいのです。

みなさんの身近なところで咲いているこのオオマツヨイグサを夕方散歩の途中にでも、もう1度よく観察してみましょう。何かおもしろいことが見つかるかもしれませんね。

(61.6.8 辻 伸夫)

クロアナバチ



葦毛湿原

執筆 伊藤悦子

協力 鈴木友之
中西正

1 はじめに

春の訪れとともに、ショウジョウバカマやハルリンドウ、ミカワバイケイソウといった花々が続々と咲き始める。水たまりでは、ヒキガエルの卵もかえり、オタマジャクシが泳ぎまわる。今年もたくさんの人々が葦毛湿原の春を楽しんだ。朝日新聞による「21世紀に残したい日本の自然百選」の一つに選ばれてからは、全国的にもその名を知られ、遠く関東・関西などからも訪れてくる人がいる。

湿原の美しさを知る人が増えていくことは歓迎すべきことである。しかし、一方では弱い自然である湿原を変化させ、湿原固有の植物の存続を危うくするような問題も起きつつある。

今、葦毛湿原で何が起きているのだろうか。愛知県に残された豊かな自然の一つである「葦毛湿原」について知り、自然と人間との関わり方や自然保護のあり方について、もう一度考えなおしてみたいと思う。

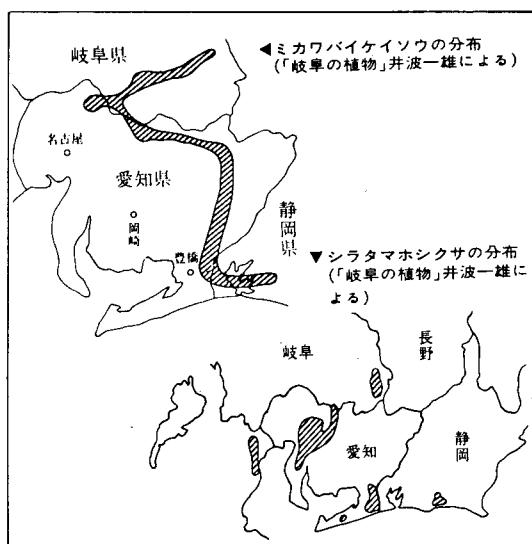
2 葦毛湿原

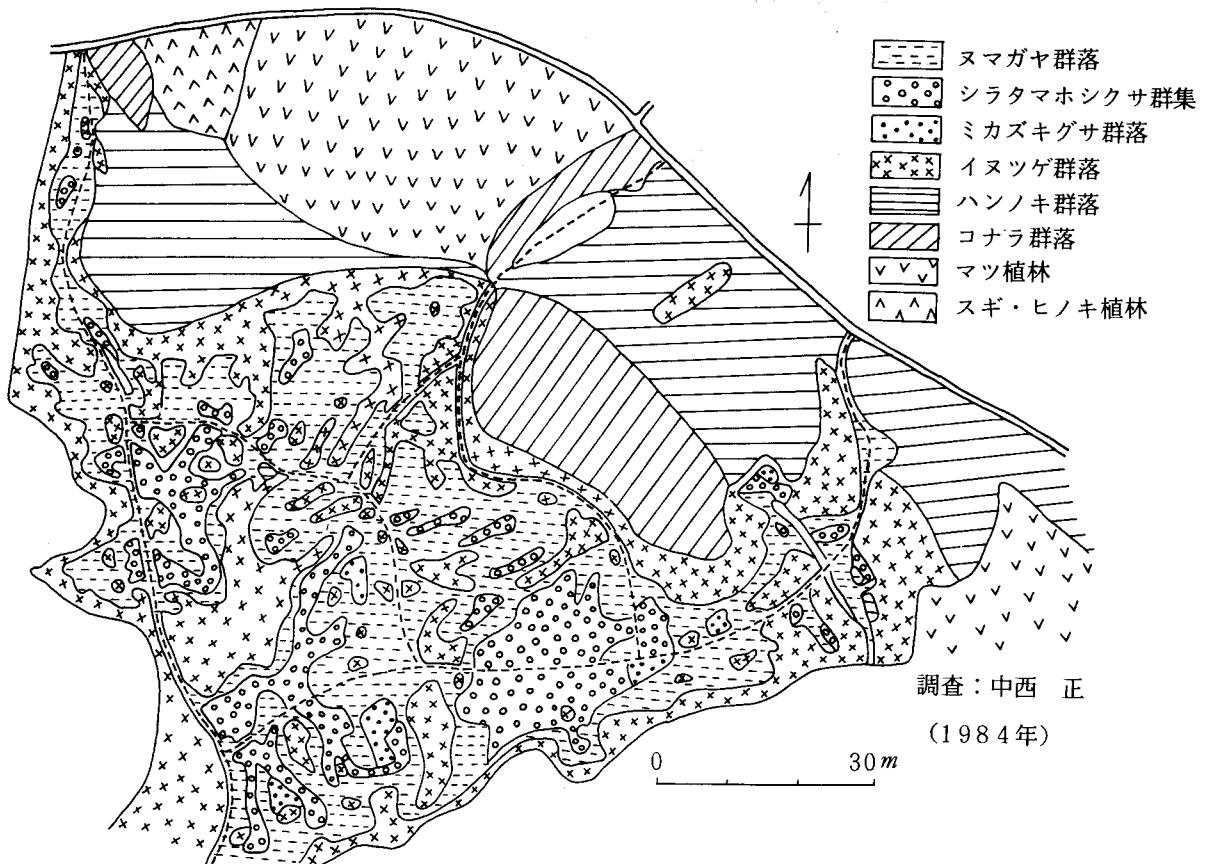
葦毛湿原は、豊橋駅から東へ6kmで交通の便が良く、誰もが気軽に訪れることができるのが最大の魅力であろう。研究者にとっても、一般の自然愛好家にとっても、ここが市街地から近く、わずかな余暇を利用してでも何回も訪れることができるので、大変都合がよいのである。

こうした地理的な利点ばかりでなく、葦毛湿原は、学術的にもいくつかの特徴を持つ貴重な湿原である。例えば、湿原の成因についても尾瀬などの湿原とは大きく異なっている。「河川湿原」「湖沼湿原」等には属さず、チャートの基盤岩からなるなだらかな斜面の上に植物のくさった土がおお

い、その間を水が流れてできたものであることもその一つである。つまり、ここは不透水層であるチャートが浅い所に伏在するので、少量の湧水であっても地中に浸透してしまわず、常時高い地下水位を保つという好条件が偶然重なってできた湿原なのである。県内の湿原は、このタイプのものが多いが、開発や開墾によって消えていく小湿原が多い中で、湿原存続のために手がうたれていることや広さの点で、葦毛湿原の価値は大きいと思われる。

また、葦毛湿原では、泥炭層が全く見られないことから見れば、低層湿原に類似している。しかし、ヨシが出現しないこと、そしてヌマガヤ群落が優占することなど、生育している植生の面からは、中間湿原的であることも特徴の1つである。しかも、高層湿原性のミカズキグサ群落や東海地方だけに見られるシラタマホシクサの大群集を持つこと、さらにミカワバイケイソウ、ミカワシオ





ガマ、ミカワシンジュガヤなどの遺存種または固有種とみられる貴重な植物も多く生育していることは、この湿原の価値を一層高いものにしている。

このほか、ヒメヒカゲ、ヒメタイコウチ、ハッショウトンボに代表される湿原性の昆虫・小動物の分布も確認されている。愛知県で見られる115種の半数を越える60種が数えられているチョウ類の他、トンボ、蛾、鞘翅目、直翅目、半翅目等々の昆虫・クモ類や野鳥（50種程）などが湿原内に生育または依存していることも合わせ考えれば、葦毛とその周辺の自然は、まさにかけがえのないものと言えよう。

3 湿原保護の歴史

今日では、多くの人々にこの葦毛湿原の価値が認められているが、昭和40年代頃までは、一部の研究者や自然愛好家に知られるのみで、そこに生育する植物が学問的にも貴重な植物群落地であることは、ほとんど知られていなかった。湿原の保護運動の第一歩は、湿原の価値を知らせる三河

生物同好会の調査から始まったと言えよう。

以後の保護対策は、後の年表の通りである。

4 葦毛湿原がかかえる問題

葦毛湿原は、愛知県に残る湿原の中では自由研究路用の枕木等の施設が整備され、パトロールの組織化も進められている開かれた湿原である。

しかし、その開かれた湿原であることが、自然保護の立場から見た時、いくつかの問題を含んでいる。植物の盗掘や移植、害藻の繁殖・踏み込み等々の植生破壊が、今も続いているからである。

例えば、昭和60年4月29日のパトロールの記録（豊岡中学）を見ると、午前8時半からわずか3時間半余りの間に訪れた人は、835人。母と3人の子（湿原内への）踏み込み注意・ビデオ撮り（の人に）踏み込み注意・オタマジャクシを持つ一家、注意してもきかない・などマナーの悪さの記載があるのをはじめ、キンラン取りの女性、注意するもきかず・コナラ林のキンランなくなるなど、盗掘に関するものも数多く見られる。トキソ

ウやヤマトキソウ、アサヒランなどは特にひどく、絶滅に近い状態である。また、多くの人が、踏み込みは一度人の足が入ると元の状態に戻るのに早くても三年はかかることを知らないようである。

自生する植物を盗掘するだけでなく、葦毛になかった植物を植え込んでしまう人もいる。人工的に葦毛の植生が崩されてしまっているのだ。自然のしくみに対する無知や誤った自然愛好の考え方をする人によるこうした問題は、今後の自然保護運動の課題であろう。

葦毛湿原のかかえる最大の課題は、土地の公有地化に関するものである。周辺の雑木林を含めて湿原全体が私有地である現況では、将来の展望を考えた本格的な保護対策は取りにくい。湿原内にトイレがないために、湿原南側斜面で用足しをする人が多く、貧養の土壌が変化し、アオミドロのような藻が繁茂し始めていること、踏み込みにより固くなった場所に外来植物が侵入していることなどに対して、「公有地化して、徹底した管理を」といった声が高まっている。天然記念物指定や県による自然生態観察園「ふるさと自然園」づくりなどの計画にのっての公有地化が立ち消えになったあと、豊橋市は、国からの補助を受けて都市計画緑地として買収する方針であると聞く。

このようにして、十年来の問題にケリがつきつつあるわけだが、買収対象地域や湿原の利用方法など、残る問題も多い。費用面の理由で、現在は湿原のみの公有地化が考えられているが、湿原の環境を作り出し保全する役目を果たしている周辺の雑木林が伐採されれば、湿原の存続は難しい。湿原及び周辺の自然も含めた公有地化が、長期的な展望に立って進められるよう、今後も要望していくことが大切であろう。

5 湿原の保護を考える

葦毛湿原の例でも分かるように、湿原は訪れる人々のほんのわずかな心ない行為によってでさえ容易にその姿を変化させてしまう。こうした弱い自然である湿原をどのようにして保護すればよいのだろうか。

湿原及び湿原周辺に全く人や人為的なものが影響しないようにして、自然のままの湿原を確保する保護は、長期間を経ておこる湿原の変化を見る

ことができ、遷移などの自然の仕組みを解明するのに役立つ。しかし、湿原がやがて林となってしまうのを見過してもよいか疑問が残るし、湿原を専門家だけのものにすることも問題である。

また、人間が管理して、貴重な種や絶滅に頻している種を守り、湿原を現在の状態に維持しようとする保護もある。これを徹底すれば湿原は、一種の博物館となり、自然といえるかどうか疑問である。

さらに、湿原を自然に親しむ場、自然保護教育の場として考えた場合、多くの人が湿原の美しさを味わったり、湿原を通して自然の微妙なしくみを学ぶという良さがあり、そこから自然を慈しむ気持ちやモラルを育てていくという効果が期待できる。しかし、反面葦毛湿原で見られたような公開による荒廃（踏み荒し・盗掘・移植）が懸念される。自然を壊さないで観察ができる施設の整備やパトロールの充実などが、公開の前提として必要であろう。また、一度公開した自然は、餌付けした動物と同様に、将来にわたって管理を続けざるを得ないことも知っておかねばならない。

湿原を保全するためには、2つの大きな問題について考えなければいけないと思われる。

まず第一にあげられるのは、開発の歯止めの問題である。愛知県内に限らず小湿原の多くは、絶えず開発の波にさらされている。葦毛湿原のようなよく名を知られた湿原でさえ、湿原周辺の雑木林などは、いつ開発の名のもとに破壊されても不思議でない状態である。

開発に対する歯止めの方法としては、『法律による規制』と『土地の公有化』の2つが考えられる。法律による規制は、自然公園法などの強い規制の網をかける方法だが、法律だけで自然を守るにはどうしても限界がある。湿原やその周辺の自然の貴重性や有益性を訴えて、みんなで守ろうという世論の合意がなければ、十分な効果はあがらないであろう。土地を公有化すれば、自然を管理する上でも、開発からの歯止めとしても大変有効である。しかし、財政上の負担に対して、やはり多くの人の同意が必要となってくる。

このように、どちらも開発の歯止めとして必要・有効な手段ではあるが、これが最終目標ではな

く、社会や景気の変動の中でも将来にわたって保全していくだけの体制づくりや保護のあり方にに対する多くの人の同意が必要であろう。

第2の問題は、保全の方向の決定の問題である。湿原を保全しようとする時、全く自然の状態に放置しておくのが望ましいのか、現状保全を望むのかによって、管理の体制は大きく異なる。また、現状保全を望むにしても、全く公開せずに種の保存をはかるのか、多少の制限はつけても公開して自然に親しむ場として湿原を考えるかによっても体制のあり方は変化する。どの方向を選ぶべきかまた誰がその決定権を持つべきなのか、問題は大きい。管理の方向が決まったとしても、実際に管理するのは誰か、永続的な保全が望まれれば望まれる程、慎重に検討していかねばならない。

そして、そのためには、湿原の現況調査や変化の状況の追跡調査を綿密にし、湿原利用のために最善の方法が選ばれるようにすることも欠くことが出来ないであろう。

管理の体制についても、ボランティアによるもの、行政が行うもの、法人等を設立して行うものなど、いくつかの方法が考えられる。このうちのどの方法によるにしても、長所、短所があり、要是地域の実情や自然の内容等によって検討されねばならない。

このように、自然を保護するためには、開発規制、土地所有、管理形態など多くの問題を検討する必要がある。そして、そのためには湿原に関係する人達や地域の住民など多くの人達の意見をそろえて保全にあたらねば、永続的に自然を守ることはむつかしいであろう。保全することが誰かの好意や犠牲の上に成り立つのではなく、合意による永続性のある保全システムが考えられなければならないであろう。保全の方向が、土地所有者の私権を制限するならば、土地の公有地化や法人有化するのが望ましいだろうし、管理者の労力提供についても、管理費用を確保することが永続的な保全には欠かせない。

自然の良さ、大切さを多くの人に伝えるとともに、こうしたことについて真剣に考えることも我々の責務であろう。

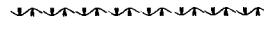
葦毛湿原の動き(年表)

40～41年	・恒川敏雄氏(三河生物同好会長)、野沢東三郎氏(文協副会長)の両氏、湿原の一部購入保護対策をはかる。
42～43年	・湿原保全のため、歩道用の枕木の寄贈あり。 ・豊橋山岳会の奉仕により、最初の遊歩道できる。 ・自然を守る会、生まれる。
44年3月14日	・県自然公園条例に基づき、弓張山系愛知県側一帯が、石巻山多米県立自然公園に指定。
45年2月8日	・豊橋自然歩道第2期工事の葦毛湿原、岩崎自然歩道の工事着工。5月31日完成。
45年12月11日	・岩崎自然歩道、葦毛湿原隣接地に養鶴場、鶴糞処理のための工事あり。協議会と地主・養鶴主との折衝の結果、中止となる。
47年8月29日	・弓張山系への自動車道路建設構想に対し、再考の要望。9月建設構想みおくり表明。
48年6月9日	・豊岡中学生徒会の葦毛湿原・岩崎自然歩道の環境保全美化活動はじまる。
48年7月30日	・湿原隣接周辺に墓地建設の計画あり。協議会の願いにより取りやめになる。
49年12月7日	・市は、葦毛湿原の公有地化と適正な利用、保全について県関係当局に対し陳情。 ・4・9年度葦毛湿原環境整備工事。(解説板、案内板、卓ベンチ、名称板など)
50年9月10日	・協議会内に葦毛湿原保全委員会を設置。豊岡中学生徒会も含め、パトロール強化をはかる。
50年11月7日	・市の環境保護調査特別委員会の踏査。県に公有化の陳情。
51年11月25日	・松くい虫の被害、葦毛湿原一帯にも拡散。防除対策考慮願を提出する。
51年12月23日	・県は、葦毛湿原植物保護の面から遊歩道ぞいに保護サクの設置工事着手。2月、完成。
52年2月24日	・松くい虫の葦毛湿原一帯の拡散の実態調査。第1回被害松の立木駆除作業、3月7日まで。
52年2月27日	・葦毛湿原遊歩道の枕木の一部老化のため、再整備作業。一部複線となる。 ・葦毛湿原一帯をゴミかご0公園に設定。
54年5月27日	

54年11月8日	・葦毛湿原周辺の歩道の草刈り作業。(多米老人クラブ奉仕)
54年12月19日	・市は、葦毛湿原来訪者のため、長尾池近くに約50台収容の駐車場を完成。
55年6月	・豊橋自然歩道本線に自然保護ゴミ持ち帰りを訴える看板を設置。
56年12月	・長尾池堤の補強工事始まる。
57年10月	・湿原北側の山林(国有林)上部で、林道工事。
57年11月	・湿原内の遊歩道の取り替え、改良作業行なう。
58年3月	・案内板の改良作業。昨年の台風時の倒木の除去作業。
58年8月	・案内板、こわされる。
59年1月	・長尾池堤補強工事始まる。4月完了。貯水はじまる。
59年11月	・湿原入口付近の案内板の改良工事始まる。12月完成。
60年1月	・長尾池の護岸工事始まる。2月、ベンチ、植樹、フェンス等ができる。(憩いの場、完成)

葦毛湿原に関する印刷物

- ・葦毛の自然 豊岡中学校 (S 5.1. 3. 8)
- ・葦毛湿原調査報告書 愛知県環境部 (S 5.3. 1. 20)
- ・豊橋自然歩道 豊橋文化協会 (S 5.5. 4. 19)
- ・葦毛の野鳥 豊岡中学校 (S 5.5. 2. 10)
- ・葦毛の自然その野鳥保護活動 豊岡中学校 (S 5.7. 5.8 年度版)
- ・葦毛の自然観察(1)～(5) 豊岡中学校 (S 5.7～6.0 年度版)
- ・葦毛湿原 東海財団 (S 5.8 年)
- ・渥美半島植物記 恒川敏雄 (S 5.9. 5. 14)
- ・葦毛湿原の植物 豊橋文化協会 (S 5.9. 7. 22)
- ・葦毛の自然観察 「ヒキガエルの産卵」 (S 5.9. 6.0 年度版)



支部だより



○支部行事結果

【名古屋支部】

- ・東谷山自然観察会 5. 18
支部では毎年東谷山で観察会を行っています。同じ場所で行うのもテーマ等で苦労します。
- ・八事興正寺自然観察会 5～8月各第1日曜日
一般の参加者が少なく、会員の勉強の場です。
- ・室内研修会 4～8月各第3水曜日
この例会も始めて4年目に入りました。他支部の方も時にはのぞいて下さい。

【尾張支部】

- ・本宮山自然観察会 5. 25
犬山市の主催で、支部の恒例行事となっています。
- ・善師野月例観察会 4～8月各第4日曜日
毎月1回同じ場所をしつこく観察しています。参加が多くないのが残念ですが、有益な会です。

【知多支部】

- ・野間海岸自然観察会 5. 25
- ・野外研修会 6. 22 (キノコ)、7. 6 (陸貝)
7. 27 (水生生物)
- ・室内研修会 4～8月各第2金曜日
岩石、土壤生物、天文などについての気楽な勉強会です。打合せのこともあります。

【西三河支部】

- ・こどもの国野外研修会 5. 25
17名の参加を得て、各分野の自然を観察できました。来年の一般観察会の候補地です。
- ・香嵐渓自然観察会 8. 10
何とか自然のしくみを知って欲しいのでテキストも工夫をこらしました。川の生物観察が子供達に人気がありました。

【東三河支部】

- ・豊橋公園自然観察会 4. 13、6. 29、8. 23
年5回のミニ観察会を、豊橋公園で計画しました。8月は夕方鳴く虫等の観察をしました。
- ・伊良湖岬自然観察会 7. 27

豊橋市の主催で、60名ばかりの参加がありました。磯の生物が子供達には好評でした。

・段戸裏谷等観察会

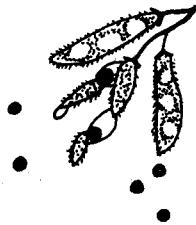
8. 9~10

会員などの親睦をかねて、段戸裏谷長ノ山湿原など北設楽の自然を楽しみました。

〔奥三河支部〕

・乳岩峡自然観察会 8. 3

鳳来町乳岩の奇岩や川の生物の観察など、夏休みの印象として子供の心に残ったでしょう。



○支部の行事から

3月30日 飯盛山観察会 (西三河支部)

曇り空の中、飯盛山自然観察会を行いました。参加者は野鳥の会、植物友の会の方も含め18名。

巴川沿いに歩いていくと、ムササビが木の皮を剥いだ跡が見えました。そして、飯盛山を登るとカタクリ、キクザキイチリンソウの花が咲いており、その回りには俳句を詠む人、写真に撮る人がいて、大変な人気でした。下山し、香積寺に行くと梅の花が満開、また、上空をヤマセミが飛んでいました。（亀蒿重範）

〔反省〕植物観察会でも鳥の観察会でもない植物も動物も大地・気象も含めた自然観察会をさらに工夫したい。（水鳥富人）

4月13日 豊橋公園自然観察会 (東三河支部)

身近かな自然（本年度は豊橋公園）を年間を通して観察し、動植物の四季による変化や生態の違いなどを見ようというこの観察会は、東三河自然観察会の新企画で、第一回は4月13日（日）に開催された。

散り始めた桜のもと茶会の開かれている三の丸会館を横目に、豊橋美術博物館裏手から出発した観察会は、切り株を使っての樹木の年輪調べ、高さ・太さの計測などもあって、親子で参加した人も楽しそうであった。また、ツボスミレ・ヒメスミレをはじめ、ムラサキケマン・ニホンタンポポ・イヌノフグリ・ホトケノザ・キュウリグサ・ハコベ・ノイバラ等の花も咲いていて、改めて調べて

みると意外に種類の多いことに驚かされた。お堀の中では、ヤブラン・ジャノヒゲ、ウラシマソウなども見られた。日当り具合による植生の違いや桜につく毛虫の越冬時のカラを見たり、エノキ・ケヤキ・ムクノキ・イチョウのかわいらしい新芽も見ることができて、春の草木への理解を深められた楽しい会であった。（伊藤悦子）

5月25日 野間海岸自然観察会 (知多支部)

雲を通しての程よい日射しの中を、野間街道を三々五々現地へ向う。浜へ到着すると視界一望に展け、潮の香を胸一ぱいにどの人も笑顔。

コンクリートの防波堤から砂浜へ降り立つ足元には、浜昼顔始め浜の草達は塩気にも頑張っている。桜貝等貝殻捨いから各班行動開始。緑の少年団や子供の集りは、波打際伝いに南へ、指導員を囲んでわいわいがやがや進んだりかたまつたり。幼児童連れの一般参加組は、打ち寄せられた海藻捨いや、その下にひそむカニ、ハゼの子、貝に夢中。さて、まで貝挑戦では、会で用意した塩が大繁盛。砂泥の表面を草かきなどでうすく取り除くと1mm位の穴が現れる。そこへ塩を注ぎ入れ待つことしばし。やがて、ニヨキーッと指状のまで貝が突き出てくる。

不思議、何故だろう。塩が辛いからか、でもこの貝以外の虫やカニの穴に塩を入れても何も出で来ない。堀ってみたらアサリがいたり、チンメ貝だったり。さて、其のまで貝、間髪容れずにぎゅっととらえないと奥深く逃げ込んで二度と再び顔を出してくれない。そこがむつかしい。やっと握ってはみたものの、小指程の貝なのにその力の強い事強い事、ちぎれそうになるけど引っ張ったら、スpon!と抜け出た。何個所も塩を入れたが成功は1回のみ。

約2時間、200m位の間で30種位もあった貝がら、数種のカニ達、なまこを捨った子も居た。小魚、えび等見せ合って楽しい海辺の自然観察会でした。

初夏の海辺の自然の中には、楽しさ、興味がこんなにいっぱいある事を再認識。もっと大勢の子に参加してもらい、教えるに教えられないこの味を子供の心に残して、素晴らしい想い出の1ページにしてやり度いと思いました。（山内美穂子）

6月22日 陸貝の観察会（知多支部）

「この埃の様なものでも陸貝ですよっよく見てごらん。ちゃんと渦巻になっているでしょう」藤原岳自然科学館の清水実先生の説明に、私達はルーペを、岩にくついている小さな生物に当てて見る。

ここは三重県員弁郡藤原町の藤原岳山麓、聖宝寺前の森林内。昨夜来の大雨もこの観察会のために止んでくれて、陸貝の観察には絶好のチャンス。ゴーゴーと溪流の音が鳴り、雨に洗礼されたヤマアジサイの花がひとときは美しい。

「ゴマガイの仲間で、イブキゴマガイといいます」「こんなに小さなカタツムリもあるのか」「何を食べているのかしら」と、皆んな驚くばかり。その他、渦巻が反対のヒダリマキマイマイ、細長いオオギセル、毛のあるオオケマイマイ、陸貝中最大のイブキクロイワマイマイ、藤原岳特産のカナマルマイマイ等の陸貝が見られた。(相羽福松)

7月6日 キノコの観察会（知多支部）

「えっ、キノコにキツネとタヌキがあるの」、「いや、これはどうもタマネギモドキでは」面白い名前が次から次へと出てくるので大騒ぎ。

ここは、東海市農業センターの一室。大池公園の松林から採集してきたいろいろのキノコを机の上に並べて、そして図鑑片手の勉強会。やがてドクベニタケ、ヒイロタケ、マンネンタケ、ハリガネオケバタケ、アミタケと同定できる。その中で以外と沢山あったホコリタケの仲間にきた時、非常に形がよく似ているので、意見が不一致。

「これは堅いけど、こちらは軟かいよ」「茎の形が少し違うようだ」「いっそのこと中を切って見たら」あちらから、こちらからと声がとぶ。結局、キツネノチャブクロ、タマネギモドキ、ノウタケ、ショウロの4種であることが解る。

知多支部の研修会は、楽しいことをモットーとして張り切っている。(相羽福松)

○地域の出来事

知多（竹内秀代）

3.25 大雨風去って快晴、日ざしは春、トカゲはじめて目にする。海岸では潮干がり

シーズンはじまり海岸もふえだす。七本木池のカモは大分少なくなる。

3.26 カマキリの卵が出終っていた。

4.5 ツバメ渡来。

4.11 連日の雨に桜散る。が、それとは逆に新芽がどんどんのびつつある。

西三河（龜萬重範）

4.12 岡崎市河合中学の生徒がゲンジボタルの幼虫を男川に放流した。

東三河（伊藤悦子）

3.30 動物園友の会主催による自然教室開催。参加者30名程。早春の草木や鳥などの観察、孵化間近のヒキガエル、アカガエルの卵の比較観察では参加者の声が一段と高まる。

4.2 葦毛湿原でカタクリの花の大量盗掘。

4.4 市内の桜が一斉に開花し始める。例年より数日遅れの開花であったが午後の気温上昇で一気に咲き出した。開花は遅かったが十日間程、目を楽しませてくれた。

奥三河（木村 滋）

3.29 東海地方サクラ開花宣言を前に鳳来寺山自然科学博物館前の静岡、河津サクラ開花。

4.3 新城市内農地でモンシロチョウ、ノジスミレ初見。

4.20 国鉄飯田線新城駅でツバメ初見。鳳来町緑化週間の一環として表参道十二支石像傍に町花「ホソバシャクナゲ」植樹

5.7 凤来町海老、副川の県道へ10数トン落石、交通止め。(基岩は安山岩その上に頁岩又上に砂岩という地層)

5.13 凤来町門谷にて「アカショウビン」初鳴。古諺どおり⁵/₁₄は「メイストーム」だった。

5.14 凤来寺山自然科学博物館観察池のナンテンに「モリアオガエル」産卵。2塊。コノハズク初鳴、他県の情報はあるが、鳳来寺山、新豊根ダムは未鳴。※1984は¹/₃₀初鳴。

会員広場



櫟(たら)の木の愚痴

木村 滋(新城市)

例年より長かった冬眠から覚めた奥三河の山の樹々は、今年の成長のために、春の陽光を一ぱい浴びて芽吹きの支度をしています。

だが、ボクだけは春が来ると悲しくなるのです。なぜ?、ボクの名前は「タラノキ」といってむかしの偉い植物学の先生が書かれた本に紹介しています。しかも、最近はボクの芽を「山菜の王様」なんて書いたカラーの本が書店に沢山並んでいます。高度成長下、美味飽食に馴れきった人間サマがこれを見逃すわけはありません。連日、私も我もで山は大賑わいで押しかけてきて、漸く開き出したボクの芽をむしり採りに来るのでです。

「トリトマラズ」の別名があるように、全身に鋭い棘をつけて身を守っていても、利口な人間サマはいろいろな道具を持ってきてボクの身体を絞めつけるやら棘をそぎ落して徹底的にいためつけるのでたまりません。他の山菜クンも気の毒だがボクだって光合成を受けて成長する権利はあるはずです。だが、1年目は許せても3年続けてむしりとられると枯死してしまうのです。

ここ奥三河でも昨今は道路がよく整備されて道路端から楽に山へ入れるので、目立つボクの友達は殆んど姿を消してしまい、生き残ったのはうんと遠い不便なところにしかおりません。それでもボクを何でもという人間サマは4WDとかいう車を使ってどんな急な山へでも出かけて、ボクを探しにくるのです。

これからハイキングのシーズン、ボクに手の出せない人間サマは山麓のみやげ店で袋詰めのボクの芽を買って帰るのを見かけると悲しくなります。

昔の人間サマは匂を味わうごく一部の雅人たちで、ふつうは棘の鎧をまとったボクなど敬遠していたそうです。だから今まで生きながらえたのです。

これからは森林浴の季節、ボクも植物です。広

げた葉から何らかの殺菌力をもつ成分を発散しているわけです。むしって食べずにボクの葉から発散する成分を吸って我慢して下さい。

~~~~(新企画)リレー投稿~~~~

一筆啓上

相羽福松(武豊町)

愛知県自然観察指導員連絡協議会は、昭和55年に発足し、当初会員数60名であったのが、今では300名に達しようとしている。

自然観察指導員のライセンスを取得し、自然の仕組や保護思想を、人々に教え伝えようとする会員が増加したことや、自然観察会が各支部に於いて、年々数多く開催されるようになったことは、真に喜ばしいことである。しかしながら、自然観察会の指導員の出席をみると以外に少く、遺憾なことである。

自然観察指導員講習会で資格を得た当初は、心勇んで各催しに参加するが、次第に熱がさめるのか欠席が多くなり、知らぬ間に影も見えなくなってしまう。入会はしたけれど、一度も出席していない方もあることであろう。

本会規約には「会員は、会の行事に協力し、少くとも年一回以上の自然観察会の指導を行なうよう努めるものとする」また、脱退の条には「会の行事に全く参加しない者」とある。

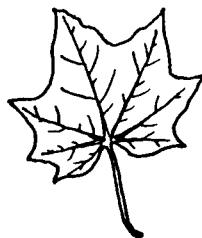
本会は、単なる自然愛好者の集りであってはならない。文字通り自然観察の指導に情熱のある同志の集りでなければならない。また、動植物に関する知識が得られる会でもない。いろいろな研修会があるが、これは補助的な行事にすぎない。あ



くまでも主の目的は、観察会を通して自然のすばらしさや大切さを、参加者に説き伝えることである。このことは、会員の任務であり義務でもある。

自然観察会には最低年一回は指導員として参加しよう。一度も出席していない会員もいるところであるが、どんな意図で入会しているのであろうか。いろいろの事情があることだろうが、本会の趣旨を考えると理解に苦しむ。

本会も発足以来、早や7年を経過しようとしている。これからは、会員も量より質の時期に来たのではなかろうか。各行事に参加して、思う今日この頃の私である。



自然保護と山村

富山 茂（稻沢市）

緑や自然に対する関心が高まってきている折、国内の森林の荒廃に関する報道に接するようになりましたが、それは何が原因なのでしょうか。

大皆伐、松くい虫、間伐の手遅れ等が挙げられるでしょう。しかし、これらの多くは、山村社会が健全であれば防ぐことができたと思われます。

かって、山村の人々の生活の基盤は山にあり、山を荒廃させるということは、自らの生活基盤を失うことを意味しました。そこで彼らは、山を荒廃させないように山を利用できました。つまり、山の持つ自然の力を損なうことのないように山を管理してきたのです。ところが、戦後「経済効率」優先の国是の下に山村社会は崩壊し、その結果として山（＝森林）の荒廃が進んだのです。そして、未だこの状態に歯止めはかかっていません。

貴重な森林等を囲い込んで保護するのも大切ですが、それにも限界があります。先に述べたような関係に歯止めをかけ、山村社会を引き上げることは自然を守るうえで大きな意味を持っています。「山村社会の引き上げ」は行政の仕事かも知れませんが、山村社会と自然保護は密接な関係があり、

残された自然を後世に残す義務を私達が負っているならばこのことにもっと関心を向けなければならぬと思います。

下刈り感懷

木見尻哲生（蒲郡市）

全身汗にまみれて大鎌をふり上げ、雑木たちを、バッサバッサと伐り倒していく。植林地の下草刈りの仕事。時にはマムシに怯え、蜂に悩まされ、イバウチに身をくめながらも、辺りに立ち込める樹液の香りに包まれて、体の疲れも忘れててしまう心地よい一時である。

“採るべからず”の自然観察指導員の立場からは、とんでもないと奢められてしまうかも知れない。しかし、この作業を通じて、自然は、観察会とは違った姿を見せてくれる。と同時に、林業の抱える問題を身をもって感じることができ、さらに、自分の生き方・暮らし方を省みる契機にもなる。

自然保護団体が林業家と敵対することがしばしばある。そこで自然保護の主張も、海外の森林破壊や石油浪費に依存した生活の上になされたものである限り、都会エゴに過ぎないのではなかろうか？自分の生活を見据え変革しようと努力を伴わない、口先だけの自然保護は慎みたいと思う。



今回から、リレー投稿を始めました。これは、投稿者が次回の投稿者を指名し、順に続けていくものです。皆様方の御協力をお願いします。

次回は、高瀬和之、高橋康夫、外山有一の3名の方にお願いします。（字数は、500字位にしてください。）

1人よがりの自然研究

竹内哲也(副会長)

1 同じ場所で継続的に観察する楽しみ

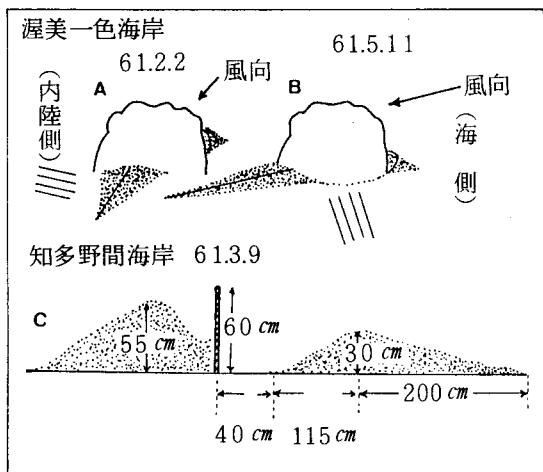
砂丘の植物を調べていると、前回に観察したものが消えていてがっかりすることがあります。砂の移動で植物が埋もれてしまうのです。再び現地を訪ると、今度は砂に埋もれていた植物の葉が黄化して地上に姿を現していることもあります。

このような観察が出来るのは、性こりもなく、季節を変えたりして何度も観察に出掛けた御蔭です。折しも雨が降ったりすると、砂の湿り具合を調べたり、雨滴が葉に着いている様子から細毛の有無を知ったり、海岸のレキを計測したりしています。コウボウムギの開花期に訪ると、手前の砂山は広面積に花が着いているのに、向こうの砂山では結実していたりするので、同じ株から茎が分かれていく様子を推測できます。色々な観点から観察や測定をして、自分なりに考えて楽しんでいます。

2 冬から春にかけて砂はどう移動するか

なるべく風の強い日に、堆砂と禿砂の出来具合をスケッチしたのが1図です。

A、Bは、砂浜に岩石や流木などがある所に、



1図 堆砂のようす

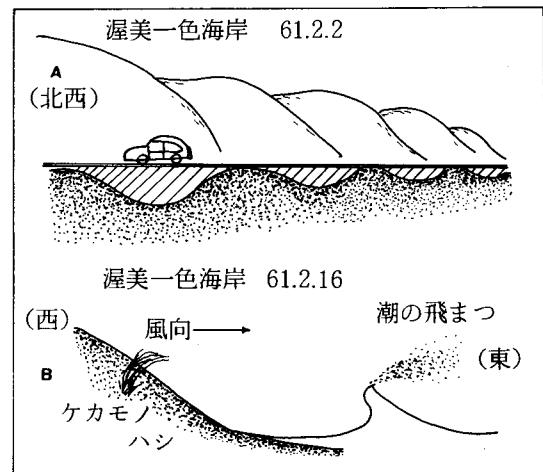
砂が溜ったり、風に吹き飛ばされた様子です。遮蔽物の風上側は、砂がえぐられたようになっています。(禿砂) 風下側は、美しい稜線のある堆砂が出現します。この稜線の向きや長さから風向や風力を知ることができます。近くで遮蔽物の無いところの風紋と直角の方向が風向きで、堆砂の稜線と一致していることで、観察結果を確認しています。このような場所には植物は育っていません。

(生態学では砂丘の不安定帶と呼ぶ所)

風が強い時に、砂浜に板切れなどを置く実験で確かめることもできます。風が比較的弱い時は、砂を遠くから投げあげると、飛砂となって風下側に堆砂が出来るのが観察できます。

1図のCは、砂防垣に吹きよせられた砂をスケッチしたものです。全く砂がたまっていない部分がありました。

2図Aは、渥美半島の一色海岸で、護岸堤防に堆積した砂の様子を遠望したものです。山の起伏と護岸堤防直下の砂の堆積は関連があることを示したものです。これに気づいたのは、同行者が護岸から降りて歩いた後、護岸上に戻ろうとして苦



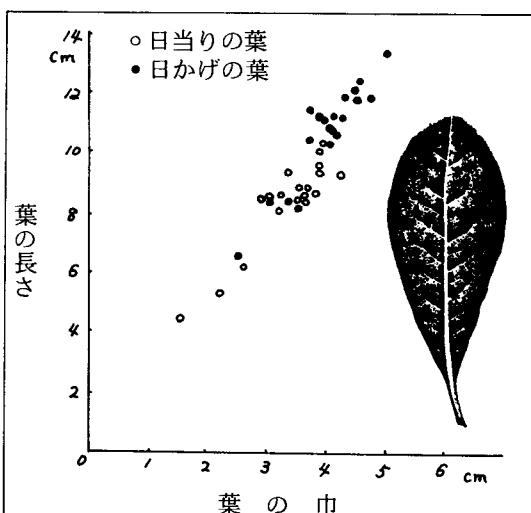
2図 砂の堆積

労した事がヒントになりました。砂の堆積が少ない場所であった訳です。このような堆砂と山並は、絵葉書にも写っているのですが、始めは気がつきませんでした。こんなことがどうして判らなかつたかと思いつつ波の方を眺めると、意外にも波がしらが沖の方へ曲って、先端が飛沫となっていました。海岸の潮の飛沫は、いつも陸の方へ来るようと思っていた認識が是正されました。砂丘の枯れたケカモノハシの先が、潮の飛沫と同じ方向へ曲っているではありませんか(B)。Aで説明したように山合いを風が吹きぬける為に砂を運んだという考え方の他に、反対向きの飛砂もあることが解りました。秋から冬にかけて北西の風が海岸に吹きおろすこともあるのでしょうか。1度や2度の観察結果から、年間の風向きと飛砂の関係を結論づけなくてよかったですとも思いました。もっと詳しく調べるには定期的に観察をする必要があります。

私の観察方法では人生の時間が短かく、何もまともられないと思いますが、なるべく書物に頼らないで、自分の目で確かめていきたいと思っています。体の具合が悪いときもありますが、自然観察をしていると、ストレスが解消し、翌日の活力が養われるような気がします。自然観察は、自然と私のコミュニケーションです。

3 海岸植物の葉の厚み

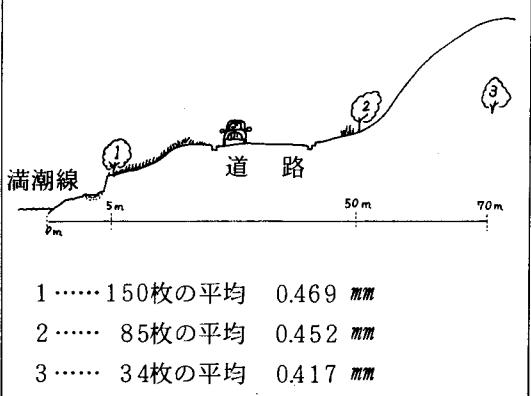
海岸植物は、一般に葉の厚いものが多いと言われています。以前に、知多半島の新舞子海岸でハマヒルガオなどを指で触って確かめたのですが、



3図 トベラの葉の大きさ

4図 トベラの生育環境と葉の厚み

調査 6.15.14



はっきりと判りませんでした。内湾のため潮風などの影響が少ない為でしょうか。よく比較するには、内陸で栽培したものと、海岸に自生したものの差を調べればよいとは思いますが、この方法は自然観察からやや外れた感じがします。時折、ツルナやオカヒジキをマーケットの食品売場で見ますが、ツルナは種そのものの葉が厚いので環境とのかかわりを知るには適当でないように感じられます。オカヒジキは自生のものと畑で栽培したものとでは葉の形も異ります。

環境と植物の形態を調べるのに都合のよい方法を考えていたとき、児童が「トベラの葉は、日陰の方が大きいね。」と教えてくれたのがきっかけとなり、学校にあるトベラの葉を計測してみました。トベラは、海岸から海岸林、さらに内陸まで自生しているし、都市緑化樹として各地に植栽されているので、海岸やその他の環境と植物との関係を調べるのに都合がよいと考えました。(図3)

5月14日に、勤務終了時刻を待ち、野間海岸へ赴き、黄色になって落葉した葉を使ってネジマイクロメーターで葉の厚みを計った結果が図4です。このことから、トベラの葉の厚みは内陸に行くほど薄くなると、言えるような気がします。

私は、環境的に見る目、比較の目、感覚的な目、発見的な目など、身をもって自然を知る喜びを分かち合いたいと、常に願っています。指導員は、書物や知識の受け売りばかりでなく、参加者とともに発見し、ともに問題解決の為に苦労をし、知的にも、身体的にも楽しい観察会としたいものです。

私と自然

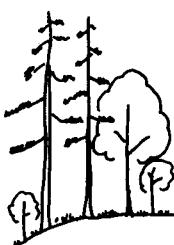
大竹 勝（会員）

私は農村に生まれたこともあって、幼児期にはカブトムシ、フナ、メダカなどと遊び、自然は常に私の身の周りにあって、それを意識することもなく毎日を過ごした。そんなときに、小学校の国語の教科書で「燕岳に登る」という文章に出会った。田園の風景しか知らなかった私にとって、シナノキンバイやハクサンイチゲの咲き乱れた日本アルプスの自然景観は鮮烈に私をとらえた。私はその山に登り、自分自身の目でその自然を確かめ肌で感じたいと願った。後から考えてみるとこのとき始めて自然を意識したといえる。

戦後まもないバラック建ての本屋には戦前の古本しかないころ、中学の先輩が、或る日“この本を読んでみろ”と渡してくれたのが、一冊の古びた岩波文庫の「ラプラタの博物学者」で、当時博物学という言葉も知らなかった私のハドソンとの出会いである。昆虫が好きであっても、私の自然界への先達はファーブルではなくこのハドソンであった。

見たことも聞いたこともないアルゼンチンのパンパスの自然は、ハドソンの鋭い観察力と素晴らしい文章で私を魅了し繰り返し何回も読んだ。幸いにも焼け残った学校の図書館に入りびたりシートン、ホワイト、ペイツ、ウォーレスを読み、昆虫以外の動植物の生活に興味を引かれていった。今もハドソンは私の愛読書であり、座右に置いてときおり「鳥と人間」の一節を読み返している。こうしたことが私を生物部へ引きつけ、そこで出会ったのが日曜日毎に部員達を自然の中に連れだしてくれた、植物の好きな若い生物の先生で生き

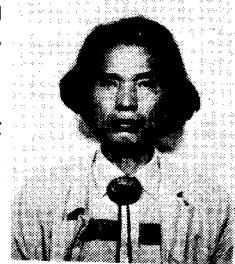
た自然を観察する楽しさを教えてくれた。私も御多分にもれず標本作りはしたもの、死んだ標本からは生きていたときの生き物との出会いのような感激は生まれてこなかつた。



この頃、山岳部員として山を歩くようになり中央アルプスに登った。山麓の樹林から亜高山帯、高山帯へと標高が上がるごとに変化していく植物相は、小学校の教科書の文章そのままで、それが生きていて目の前に次々と展開していく感激を今も忘ることはできない。山岳会に所属して山登りを続けたが、山の仲間たちの興味が山頂を究めることや、岩登り、冬山、エベレストに向いてくると山岳会に興味を失い、ゆっくりと自然と対話をしながら一人で山を歩くようになった。

私は山は今でも好きであるが頂上よりも山麓や中腹が好きで、それも春から夏にかけてである。そこからは植物、昆虫、鳥、獣たちが生活を共にしている自然の鼓動が伝わってくるからである。先人が“山高きがゆえに尊からず、樹あるをもって尊しとなす”という言葉を残したが、これが私の自然を見る基本となっている。当時は樹を文字通り樹木と解していたのであるが、その後自然との付き合いのなかで、この樹とはバランスのとれた生態系としての森林で、同じ森林でも人工林ではない自然林と理解している。

最近、天然林は確かに素晴らしいと思うし好きでもあるが、毎日見ている身近な生き物の営みこそ私にとって大切な自然であると感じている。どんなに素晴らしいでも遠くの自然は一駒のスチール写真で、その自然の一断面を捉えているにすぎないからである。そこで生活しない私にとってはやはり遠い存在である。それよりも、日々の散歩道で刻々と変化していく自然のほうが生きている。観察を継続することによってダイナミックな自然のドラマに接することができる。より良い自然に接したとき、この身近な自然を物差しとしてそのより良い自然の価値を知り、いつまでも残しておきたいと心から願うことができる。



協議会行 報 告

61. 5. 24 理事会

主な議題は、6月29日（日）開催予定の総会の議案及び協議会運営規定の一部改正でした。

総会の議案は、昭和60年度の事業実績及び収支決算でした。これらは、収支決算書の記載方法に若干の修正を加えたほかは原案どおり了承されました。

協議会運営規定の改正は、事務局である県自然保護課から「事務局の責任の明確化」及び「支部機能の充実」を図ることを目的に提案されました。具体的には、県当局の担当者の異動によって協議会の運営に支障が生じないように事務局の担当事務を明確にすること及び各支部において支部事務局を設け、会員の管理、資料の配布等の事務の一部を支部事務局に移管するというのがその主な内容です。

これに対して、「協議会はいつまでも県におんぶするのではなく、企画運営委員会を中心に独自性

を発揮すべきだ」という積極意見と「会全体をみると支部体制が確立されていないところもあり、慎重に検討すべきだ」という消極意見とが出されました。理事会としては、今後の会の運営に重大な影響が生じるおそれがあることなどから、今後時間をかけて慎重かつ継続的に検討してゆくことになりました。

その他、各支部の年間行事予定や東谷山自然観察会（名古屋支部県共催）へ寄せられた投書（指導員の勉強不足を指摘したもの）等が報告されました。

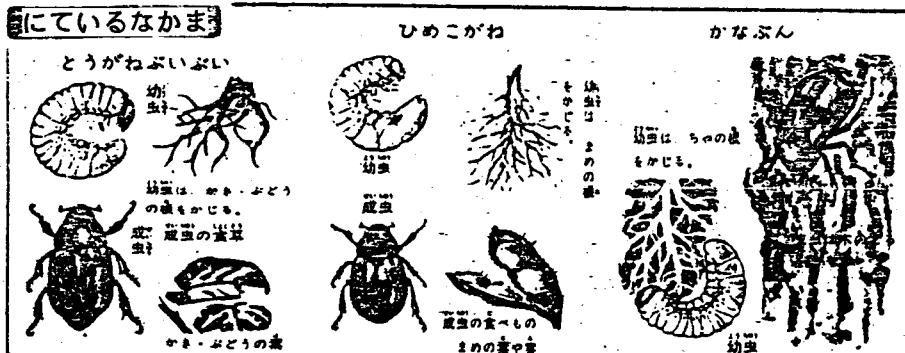
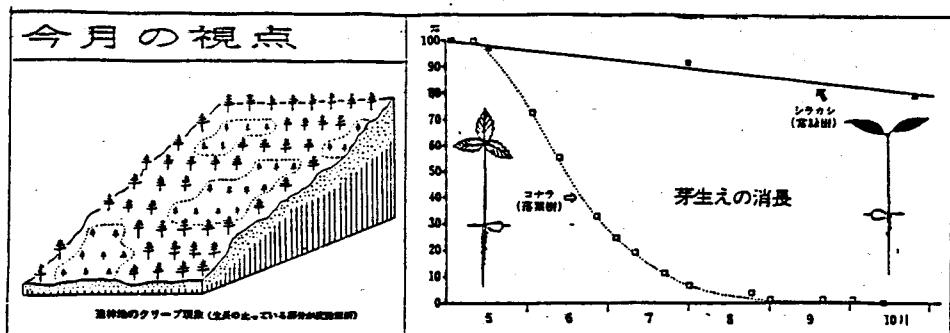
61. 5. 30 編集委員会

協議会ニュース16号の構成及び表紙と裏表紙のレイアウトの変更並びに17号の企画を行いました。

この他、レイアウトについて、佐藤さんが簡単に講習を行いました。

富士箱根伊豆自然観察指導員連絡会通信No.47、48より転載。今後、隨時掲載します。

他 県 の 協 議 会 機 関 紙 か ら



富士箱根伊豆自然観察指導員連絡会通信No.47、48より転載。今後、隨時掲載します。

行 事 案 内

期 日	主 催	内 容
10. 5 (日)	名古屋支部	自然観察会(八事興正寺) 9:30 興正寺児童遊園集合(午前中)
	東三河	自然観察会(伊良湖岬)
10. 5 (日)	“	10:15 伊良湖港湾センター前集合
	奥三河	自然観察会(牛の滝)
10. 5 (日)	“	10:30 飯田線東上駅集合(要昼食)
10. 10 (祭)	名古屋	観察会下見(天白公園) 9:30 天白社会教育センター前集合
	“	月例会(森林の観察)
10. 15 (日)	名古屋	18:30 名古屋市教育館(中区栄)
	“	自然観察会(天白公園)
10. 19 (日)	名古屋	自然観察会(天白公園)
	“	10:00 天白社会教育センター前
10. 26 (日)	尾 張	月例観察会(犬山市) 9:00 名鉄善師野駅前集合
10. 26 (日)	知 多	自然観察会(大池公園) 9:30 東海市役所駐車場(池の下)
11. 2 (日)	名古屋	自然観察会(八事興正寺) 9:30 興正寺児童遊園集合(午前中)
	“	協議会 観察研修会(段戸裏谷)
11. 3 (祭)	“	10:00 段戸裏谷入口駐車場集合
	尾 張	自然観察会(善師野) 10:00 名鉄善師野駅前集合(要昼食)
11. 14 (金)	知 多	月例会「造成地の植物」 18:00 阿久比町中央公民館
	“	自然観察会(天白公園)
11. 19 (水)	名古屋	月例会「南アジアの自然」 18:30 名古屋市教育館(中区栄)
	“	月例観察会(犬山市) 9:00 名鉄善師野駅前集合
11. 30 (日)	尾 張	自然観察会(豊橋公園) 10:00 美術博物館前集合(午前中)
	東三河	“

会 員 移 動

〈加 入〉

三戸幸久 犬山市富岡新町2-27 (尾 張)

清水光治 刈谷市小垣江町上松39-1(西三河)

松永知永 一色町下乾地22-2 (“)

〈脱 退〉

伊藤義和 田倉裕子 竹下怜治 竹下久子

富田 晶 本多 優

お 知 ら せ

◦ 観察研修(段戸裏谷他) 61. 11. 3

秋の北設楽の自然を観察しませんか。学術参考保護林である段戸裏谷などの自然を観察します。集合は、段戸裏谷入口の駐車場。10時までにお集まりください。当日、現地へ来ていただいてもかまいませんが、資料準備等のため、できるだけ伊東仙治郎(05338-4-5841)又は佐藤国彦(05617-3-5674)へ申し込んでください。車の都合のつかない方も調整します。なお、昼食は各自用意してください。雨天でも決行しますが、荒天の時は、申し込み者へ連絡して中止することがあります。

刊 行 物 案 内

- 濑戸市史 資料編2「自然」 発行: 濑戸市
出版: 第一法規出版㈱ 有料
(瀬戸市民族資料館にあり)
- 「親と子の面白地学ハイキング 東海編」
著者: 池田芳雄 発行: 風媒社 B6版
338 ページ 1,600円

【編集後記】

またまた機関紙の発行が遅れてしましました。本年度の第1号が、盛んに虫の鳴く秋に発行となってしまったこと、深くお詫びいたします。美しい絵を表紙のために描いていただいている辻さんにも、時期遅れとなったことを申し訳なく思っています。

本号では特集として葦毛湿原を取り上げました。14号に引き続いて湿原を対象としたので、またかとお思いでしょうが、湿原は本県の自然の特徴であり、貴重な自然を考えるよい材料であると考えて、再び特集としました。御意見をお待ちしています。次回は、都市近郊の身近な自然を特集の予定です。(佐藤)

編集事務局: 名古屋市名東区香南1の101
県営住宅 7-511 (渡並喜一郎)